

# 母語話者と学習者の日英語移動表現における事態認識

## —副詞的要素の使用から—

眞野美徳(鳴門教育大学) 吉成祐子(岐阜大学)

### 1. はじめに

本稿の目的は、移動表現における副詞的要素の使用から、“thinking for speaking (話すための思考, Slobin, 1996)”を探ることである。Slobin は、話者が事象を言語化する前の認識の段階で、事象のどの側面に注目するかが各言語で異なることを主張し、その認識プロセスを「話すための思考」と呼んでいる。本稿では、言語産出実験から得られたデータをもとに、何を言語化するかという点において日英語母語話者の事態認識の特徴を探ると共に、母語における「話すための思考」が学習者言語に影響していることを主張する。そして、これまで重要視されてこなかった副詞的要素の分析が、話者の事態認識のさらなる解明につながる可能性を示す。

### 2. 先行研究の概観

#### 2.1 移動表現における経路表示の類型論

移動事象には移動物 (Figure) や移動の経路 (Path), 移動の様態 (Manner) など、様々な意味概念が含まれており、それらがどの言語形式で表されるのかは言語によって異なる。Talmy (1991; 2000 他) は、移動事象概念のうち、経路がどのような言語形式で表されるのかに注目し、言語を分類している (経路表示の類型論)。そして、(1) で示す日本語のように、経路を主動詞で表す言語を「動詞枠付け言語」、(2) で示す英語のように、動詞以外の要素 ((2) では前置詞) で表す言語を「付随要素枠付け言語」と名付けている。松本 (2017) は、より厳密に経路表示位置を検討し、前者を「経路主要部表示型言語」、後者を「経路主要部外表示型言語」と呼んでいる。本稿では、複雑述語・複合動詞といった複雑な経路表示位置を持つ日本語を対象とすることから、松本 (2017) の用語に従う。

- |     |        |         |             |           |
|-----|--------|---------|-------------|-----------|
| (1) | 彼は     | スキップして  | 部屋に         | 入った。      |
|     | Figure | Manner  | Ground-Path | Path      |
| (2) | He     | skipped | into        | the room. |
|     | Figure | Manner  | Path        | Ground    |

これらの移動表現における類型については、母語だけではなく第二言語においても盛んに研究が行われてきた。日英語は異なる類型に分類されるため、習得における類型の影響の有無や、学習者共通の特徴が議論されてきたが (Inagaki, 2001; Spring & Horie, 2013; 吉成他, 2021, など), 副詞的要素に着目した研究は管見の限り見当たらない。

#### 2.2 移動事象の認識と言語化

移動表現では、どのような概念をどのくらい習慣的に表現するかが言語によって異なることも知られている。たとえば、英語は移動の様態を高い頻度で表現する言語である一方、日本語は話者との位置関係の変化 (Deixis, ダイクシス) を高い頻度で表現する言語だとされる (古賀, 2017 など)。Slobin (1996; 2004) は、付随要素枠付け言語の話者のほうが動詞枠付け言語の話者よりも、様態の表示を頻繁に行うとしたが、これは事態認識の段階で、習慣的に事象のどの側面に注目するかが各言語話者で異なるためであるとし、このような認識プロセスを、「話すための思考」と呼んでいる。

また、移動事象をどのような構造を用いて表現するかについても、言語間の差異が指摘されている (Bohnenmeyer et al., 2007)。英語などの言語では1つの節で動詞と共に複数の前置詞句などを用いて、複数の参照物が関わる経路を表現するのに対して、日本語のようにそうしない言語もある。

どのような意味概念を表出するのか、そしてそれをどのように表現するかは言語ごとに異なる可能性があり、そこに各言語話者の事態認識の傾向が現れると言えるだろう。

### 2.3 学習者の副詞使用

副詞は、言語教育や第二言語習得研究において、あまり焦点を当てて取り上げられることのない品詞であり、英語・日本語教育においても、意味の教授が中心となっている現状がある。第二言語習得研究に目を向けても、使用される副詞の種類（日本語学習者の程度副詞使用など）などを取り上げる研究はある程度存在するが（cf. 胡（2020））、母語の影響や表出傾向など、学習者が副詞を使用する際に見られる特徴の研究は他の品詞と比較すると、非常に少ない。

移動表現研究においても、これまで注目されてきたのは、経路や様態が主要部である動詞で表されるのか、主要部外要素で表されるのかという点であり、主要部外要素の1つである副詞的要素に焦点を当てた分析が行われることはあまりなかった。しかし、副詞や形容詞の連用形などの副詞的要素は基本的に修飾要素であり、出現位置の自由度も高く、これらの性質ゆえに母語話者の事態認識の特徴や、学習者特有の特徴が現れる可能性は高い。

## 3. 実験方法

本稿では、移動事象の描写における母語と学習者言語の副詞的要素使用の特徴を探るため、日本語・英語母語話者と、各言語を母語とする中級レベルの英語・日本語学習者を対象に、様々な移動事象からなる52の映像を見せ、口頭で描写させる産出実験を行った。使用したのは、国立国語研究所の共同研究プロジェクト『空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究』（代表：松本曜）で作成されたビデオ映像である。映像には、自立移動や使役移動などを含む様々な移動事象が含まれており、実験はパソコンを使用して行われた。指示はすべて画面上で示され、参加者はその指示通りに移動事象についての描写を行う。実験参加者は、日本語母語（J-L1）話者22名、英語母語（E-L1）話者23名、英語を母語とする日本語（J-L2(e)）学習者15名、日本語を母語とする英語（E-L2(j)）学習者15名である。各言語の母語話者データは上記プロジェクトで得られたものを利用した<sup>1</sup>。

録音されたデータは文字化され、一定の基準でコーディングされた。言い直しがあつた場合は、最後の発話のみを採用した。本稿で分析対象とするのは、52場面中、異なる経路・様態・ダイクシスの組み合わせから成る27場面の自立移動事象（経路|TO/UP/TO. IN|×様態|WALK/RUN/SKIP|×ダイクシス|TOWARD-SPEAKER/AWAY-FROM-SPEAKER/NEUTRAL|）であり、移動事象概念の表出方法と副詞的要素に着目して分析を行った。

## 4. 結果と考察

### 4.1 各意味概念への言及と表出方法

まず、各言語話者の事態認識の傾向を見るために、各移動事象概念（経路・様態・ダイクシス）がどのくらい言及されているのか（表1）、主要部である動詞ではどの概念が表されているのか（図1）を、吉成他（2021）で報告した結果をもとに見ていく（母語話者データの分析については脚注1参照）。主な回答例は(3-4)に示す（下線部は主動詞）。

表1. 移動事象概念言及率（吉成他 2021 より一部抜粋）

		経路	様態	ダイクシス
日本語	J-L1	92.3%	80.8%	94.1%
	J-L2(e)	67.9%	77.8%	51.4%
英語	E-L1	91.8%	93.9%	42.7%
	E-L2(j)	71.9%	79.8%	51.4%

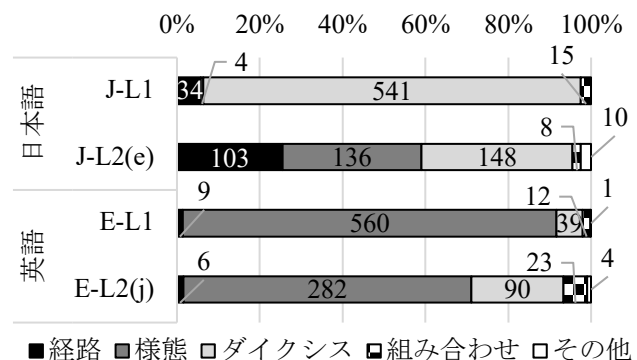


図1. 主動詞で表される意味概念（吉成他 2021 より一部抜粋，数値は回答数）<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 母語話者データの担当者はそれぞれ、日本語（吉成祐子・古賀裕章）、英語（秋田喜美・松本曜・眞野美穂）である。この日本語や英語のデータを用いた成果については、古賀（2016）、吉成（2017）、Koga (to appear)、Tanigawa, Takahashi & Matsumoto (to appear)を参照されたい。

<sup>2</sup> 「組み合わせ」とは、(4b)のように重文で2つ以上主動詞がある場合を指す。

- (3) a. 友達が駆け足で階段をのぼっていった. (J-L1, |UP×RUN×AWAY-FROM-SPEAKER|)  
 b. 友達は自転車に向けてうれしそうに歩いた. (J-L2(e), |TO×SKIP×NEUTRAL|)  
 (4) a. My friend runs up the stairs away from me. (E-L1, |UP×RUN×AWAY-FROM-SPEAKER|)  
 b. My friend is running and going upstairs. (E-L2(j), |UP×RUN×AWAY-FROM-SPEAKER|)

表 1 より、各言語の母語話者の結果を見ると、そもそも日本語と英語とでは、どの移動事象概念を表出するか（つまり、どの概念に注目するか）が異なることが分かる。J-L1 はダイクシスに言及する率が高く、E-L1 は様態に言及する率が高い。このような傾向を持つ言語を母語とする学習者が各学習言語で移動事象を描写する際、全体的に言及率が低くなるものの、母語と同様の特徴が見られた。つまり、J-L2(e)は様態に言及する率が高く、E-L2(j)はダイクシスに言及する率がE-L1 よりも高かった。このことから、話すための思考は学習言語での表出の際にも影響があると言えるだろう。また、図 1 でも、各言語の L1 の主動詞で表される移動事象概念の傾向は異なり、L2 にもその母語の特徴がある程度見られた。つまり、J-L2(e)は様態を、E-L2(j)はダイクシスを主動詞で表すことが、各言語の L1 よりも目立つ。これらの結果から、移動事象概念の何に注目し、それをどのように表出するのかには、母語の影響があると考えられる。

#### 4.2. 副詞的要素での表出

次に、副詞的要素で表されるものに着目して、データを分析する。副詞的要素に含めたものは、日本語においては副詞と形容詞の連用形（例：速く）、副詞句（例：駆け足で）などで、英語では副詞と不変化詞 (particle)、副詞句 (e.g. *over there*, *in a hurry*) である。

全回答における副詞的要素の使用率は、J-L1 で 12.3%、J-L2(e) で 19.3%、E-L1 は 26.7%、E-L2(j) で 16.8% であり、E-L1 での高さが目立つ。使用される副詞的要素にも違いがあるのだろうか。表 2 は、副詞的要素が示す意味概念の延べ個数と 1 回答あたりの副詞的要素の平均使用頻度を示したものである。“He skips fairly slowly towards a bicycle further down the path.” のように、1 文中に 2 つ以上の副詞的要素が使用された場合はそれぞれ数えており、実験で設定された移動事象概念以外を表すもの（例：*energetically*, ちょっと）も数えている。

表 2. 副詞的要素が表す意味概念と平均使用頻度

言語		人数	移動事象概念			その他	合計	1 回答あたりの平均使用頻度
			経路	様態	ダイクシス			
日本語	J-L1	22	1	67	0	6	72	0.121
	J-L2(e)	15	0	65	0	19	84	0.207
英語	E-L1	23	131	21	0	47	199	0.317
	E-L2(j)	15	47	7	0	20	74	0.183

表 2 から、日英語の副詞的要素の使用と頻度には大きな違いがあることが分かる。日本語では J-L1 も J-L2(e) も、共に様態を表すものがほとんどであるのに対し、英語 (E-L1, E-L2(j)) では経路を表すものが多い。これは、経路主要部表示型の日本語では経路（やダイクシス）は主動詞や「駆け上がった/走っていった」のような複合動詞や複雑述語などの述部で表されるが、経路主要部外表示型の英語では様態が主動詞で表されるため（図 1）、当然の結果とも言える。

日本語においては、J-L1 も J-L2(e) も副詞的要素では様態を表すことで共通しているが、表現を見ると、J-L1 でしか使用がないもの（例：駆け足で、小走りに）や、J-L2(e) でしか使用がないもの（例：うれしそうに、速く）があった。J-L2(e) では、SKIP という様態を「うれしそうに歩いた」と表現しているものもあり、誤用とまでは言えないが、様態を表すために J-L1 にはない副詞的要素を用いる傾向が見られた。J-L2(e) の方が副詞的要素の使用頻度も高く（表 2）、J-L1 にはなかった、程度や時間の副詞（例：かなり、今も）も使用されていた。

英語においては、表出する概念の傾向に E-L1 も E-L2(j) も大きな違いはないが（表 2）、E-L1 の副詞的要素の使用頻度の高さが目立つ。さらに、様々な種類の副詞的要素が観察されたため、その内訳を表 3（次頁）に示す。この結果から、E-L1 は多様な副詞的要素を使用し、移動事象概念だけではなく様々な意味を表していることが分かる。これが、先に述べた J-L2(e) での副詞的要素の使用頻度の高さとその種類に影響したと考えられる。一方、E-L2(j) の副詞的要素の使用頻度は低く、経路や場所を表すものなど (e.g. *upstairs*, *away*, *over*, *over there*)、移動事象の中心的な意味概念に限定されており、その点で母語である日本語 (J-L1) との共通点が観察された。また、限定された語句のみを使用するという傾向もあった。

表3. 副詞的要素の種類 (英語)

種類 言語	副詞					不変化詞	副詞句					合計
	様態	経路/場所	時	程度	その他	経路	様態	時	場所	その他		
E-L1	22	5	17	21	2	124	2	3	0	3	199	
E-L2(j)	2	34	2	3	2	13	5	1	12	0	74	
(例)	quickly	upstairs	now, again	just, right	together	up, away, over	in a hurry, on foot	for a moment	over there	kind of		

副詞的要素に関わる誤用は、限られた語句のみを使用していたE-L2(j)ではほとんど観察されなかったが、J-L2(e)ではいくつか見られた。個人差はあるものの、「\*うれしに、\*速くに」のような、活用の間違いが目立った。これは、日本語には形容詞の連用形を用いるという形式の複雑さがあるからだと考えられる。

## 5. おわりに

実験結果から、まず、日英語で事象を描写する際に注目する点に差があることが分かった。そして、副詞的要素を見ることで、移動事象概念の何に着目し、表出するのか、それ以外の何を言語化するのかという点に言語差が観察され、事態認識の差である可能性が示唆された。さらに、これらの母語における「話すための思考」が学習者言語に影響していることを指摘し、副詞的要素の分析が話者の事態認識のさらなる解明につながる可能性を示すことができたと考えられる。

**謝辞** 本稿は、国立国語研究所「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法（動詞の意味構造）」プロジェクトの一貫であり、JSPS 科研費（15K02753, 21K00761）の助成を受けて行われている。

### 参考文献

- Bohnemeyer, J., Enfield, N. J., Essegbey, J., Ibarretxe-Antuñano, I., Kita, S., Lüpke, F., & Ameka, F. K. (2007). Principles of event segmentation in language: The case of motion events. *Language*, 83(3), 495-532.
- 胡 娜 (2020). 第二言語としての日本語の副詞習得に関する研究の概観及び今後の展望 言語・地域文化研究, 6, 589-603.
- Inagaki, S. (2001). Motion verbs with goal PPs in the L2 acquisition of English and Japanese. *SSLA*, 23, 153-170.
- 古賀裕章 (2016). 自律移動表現の日英比較—類型論的視点から— 藤田耕司・西村義樹 (編) 日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学— 開拓社 pp. 219-245.
- 古賀裕章 (2017). 日英独露語の自律移動表現：対訳コーパスを用いた比較研究 松本曜 (編) 移動表現の類型論 くろしお出版 pp. 303-336.
- Koga, H. (to appear). Motion event descriptions in Japanese. In Matsumoto (to appear).
- 松本曜 (2017). 移動表現の類型に関する課題 松本曜 (編) 移動表現の類型論 くろしお出版 pp. 1-24.
- Matsumoto, Y. (ed.) (to appear). *Motion event descriptions from a cross-linguistic perspective: Case studies*.
- Slobin, D. I. (1996). From 'thought and language' to 'thinking of speaking'. In J. J. Gumperz & S. C. Levinson (Eds.), *Rethinking linguistic relativity*, pp. 70-96. Cambridge: Cambridge University Press.
- Slobin, D. I. (2004). The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist & L. Verhoeven (Eds.), *Relating events in narrative, vol. 2: Typological and contextual perspectives*, pp. 219-257. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Spring, R., & Horie, K. (2013). How cognitive typology affects second language acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English. *Cognitive Linguistics*, 24, 689-710.
- Talmy, L. (1991). Path to realization: A typology of event conflation. *BLS*, 17, 480-519.
- Talmy, L. (2000). *Toward a cognitive semantics: Vol. II: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Tanigawa, M., Takahashi, R., & Matsumoto, Y. (to appear). Motion event descriptions in English, German, and Norwegian. In Matsumoto (to appear).
- 吉成祐子 (2017). 言語使用の観点から見た移動表現の類型論：日本語・英語・イタリア語話者の主体/客体移動表現 西原哲雄・田中真一・早瀬尚子・小野隆啓 (編) 現代言語理論の最前線 開拓社 pp. 216-230.
- 吉成祐子・眞野美徳・江口清子・松本曜 (2021). 移動表現の類型論と第二言語習得 くろしお出版。